

■ 自著紹介 ■

上海1944-1945：武田泰淳『上海の螢』注釈



大橋毅彦
山崎眞紀子
[ほか] 編著・注釈

双文社出版
2008.6

『上海の螢』は、武田泰淳が一九四四年六月から四六年二月までの日中戦争下、中日文化協会の職員として上海に渡ったときの経験をもとに描いた泰淳晩年の作品である。文芸誌『海』連載中に泰淳は亡くなった。その後、単行本として刊行されたが、現在では文庫にもなっておらず、古書店で求めるしかない。本書は『上海の螢』テキストそのものを上段に掲載し、下段に注釈を加えていくという二段構成をとっている。古書店で探さなくてもテキストを読むのに最適であるし、時代の文脈に戻さなければわかりにくくなった小説内の用語も注釈が記されているので、読むことに苦労することはないと思う。

『上海の螢』は日本の占領下に置かれた瀕死状態の上海の姿を、哀切と罪の意識と、また上海の持つ不屈の逞しさなど複雑に交錯する上海の様相を織り交せて、見事に描ききっている名作である。いま現在もめまぐるしく発展している国際都市・上海は、目を離すと昔あった建物が新しい近代的なビルディングへと姿を

変えていき、それまでとは全く異なった表情を見せる新陳代謝の活発な都市である。その一方で70年前の建物も依然として残っている一画もある。残っている内に調査を進め、消えゆく前に留めなければならぬと現地調査にも赴いた。

幸いにも札幌大学から研究助成金を受けることができ、二ヶ月に一度程度行われる大阪での研究会出席や上海実地調査が可能になり、ああ、ここに泰淳が勤務していた協会があったのかと現存する建物をこの目で見ることができ、その空間に身を置くことができたおかげで小説にあふれている泰淳の上海に向ける熱い思いの一端を理解できたように思う。刊行まで苦労を重ねたが、こうして一冊にまとまったことは非常に嬉しい。研究会メンバーと札幌大学に深く感謝申し上げる。武田泰淳という偉大な作家の遺作を是非、本書で読んでいただければ幸いである。[913.6 || Ta59]

(法学部教授 山崎眞紀子)

いち押しBOOKS

Book Ichitoshi

こころ

夏目漱石作 (岩波書店 1989.5[岩波文庫])

『こころ』は夏目漱石の代表作で内容は良く知られていますが、高校の授業などで一部を読んだだけで、本編を読んだ事のある人は意外に少ないのではないのでしょうか。

夏季休暇中に鎌倉で気ままな生活を楽しんでいた「私」は海岸で「先生」に出会い、その不思議な人柄に惹かれた「私」は「先生」と親交を結ぶようになり、徐々に「先生」の心の奥底に近づいていく。その段階で先生は元々明るい性格で、大学生時代に親友が突然自殺したことで性格が今ようになってしまったとの話で、先生に聞いてみても「時期が来たら残らず話す」と言うだけで、詳しいことは語られなかった。その後父親の見舞いの為に帰郷した「私」は先生の過去が明かされた手紙を受け取る。信頼していた親族に裏切られて財産を奪われた「私」は普段はどんなに善良な人間でもふとした瞬間に悪人となって平気で人を裏切ることに絶望し、人間不信になってしまう。「私」は東京の大学に進学し、下宿先のお嬢さんに「神聖な愛」を抱くようになるが、時を同じくして親友のKからお嬢さんに対する恋心を打ち明けられ、「私」はKの恋心を諦めさせるために「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と突き放したその一方で自分はお嬢さんとの結婚の約束を取り付けるという親友に対する裏切り行為を行い、それを知ったKは自殺してしまう。結局自分も己のことしか考えられない人間であるとの自責の念に駆

られた「私」は誰にも苦しみを打ち明けることができず、「死んだように生きて行く」つまりは人生に喜びが感じられず、誰のことも信じる事ができず、ただ生きているだけの状態のまま時を過ごす。そんな折に明治

天皇崩御の知らせを聞き、それをきっかけに自殺を決意するが、しかしその一方で「人生の中でたった一人でもいいから心から誰かを信用して死にたい」と考えて、「私」に自分の過去を打ち明ける。手紙の最後はあなたにだけ打ち明けたことだから、妻が生きているうちは誰にも語らないで欲しいと書かれていた所で物語は終わり「先生」の生死は語られていない。

この本の内容を簡単に言うならば、上記のように三角関係に苦しんだ人間の話ですが、この物語の根本にあるのは人間の心理、つまりは『こころ』の動きがテーマなのだと思います。明治時代の話ですが、現代の日本語の基礎となったほど読みやすい文体であり、メインが心理描写なので、現代でも違和感無く読める本だと思います。内容を知っているからといって敬遠せずに手にとってみてください。[B913.6 || N58]

(法学部3年 森春奈)

